

北朝石刻にみる「観世音仏」信仰

倉 本 尚 徳

はじめに

観世音菩薩は、『法華経』普門品などに説かれるように、現世の人々の苦難を免れさせる大いなる神通力を有する菩薩として、釈迦や阿弥陀仏に劣らず篤く信仰されてきた。普門品においては、観音の来歴は説かれておらず、観音信仰が高まりを見せ始めた中国の南北朝時代の人々にとって、観音と仏との関係をいかに理解するかということは、大きな関心事であったと考えられる。従来の研究において、観音の成仏については、少し言及される程度で専論はないと言ってもよい状況にある。本論では、観音菩薩の来歴や成仏にかかわる経典の説について概観し、敦煌文献や石刻資料を利用して北朝時代の「観世音仏」にかかわる信仰の様態を明らかにしてみたい。

一 観音の成仏を説く主な経典

観音について言及する経典は数多いが、観音の来歴や来世における成仏について言及しているものはそのうち一部分である。⁽¹⁾その主な翻訳経典として、①曇無讖訳『悲華経』大施品、授記品や②曇無竭訳『観世音菩薩授記経』があり、ともに、観音を西方浄土において無量寿仏あるいは阿弥陀仏を継いで成仏する補処の菩薩として位置づける。

それに対し、中国撰述と考えられるものとして、③『観世音三昧経』や④『弘猛慧海経』（『観世音十大願経』）がある。ともに、経録では『法経録』巻二・衆経疑惑部に初出する。前者については、守屋孝蔵氏旧蔵本を底本として敦煌本と対校し、現代語訳されたものが、牧田諦亮『六朝古逸観世音心験記の研究』（平楽寺書店、一九七〇年）に収録される。この経では、観世音菩薩は釈迦より前に成仏しており、「正法明如来」と号し、時に彼の仏のもとで苦行の弟子であったのが

北朝石刻にみる「観世音仏」信仰（倉本）

釈迦であり、正法明如来は、観世音大菩薩と号して今この世に現れたと説く。『弘猛慧海経』は現在失われており、後代の経疏の引用によって梗概が知られるのみである。概要を述べると、昔、この閻浮提において普首（あるいは善首）という王のもと五百人の王子がおり、その第一を善光と言った。善光は空王観世音仏に会い、十大願をおこした。また、来世においても観世音と名のり、衆生が病苦にあい、三度観世音の名を唱えても救われないものがいるならば、上妙色身をとらない（正覚を成じない）という願をたてた。それゆえに観世音菩薩はひとえにこの土に縁があると説いている。

つまり、観音の来歴に関して、観音を西方浄土における阿弥陀仏の補処の菩薩とする翻訳經典の説とは異なる説明をしたのが③と④であると考えられる。特に、成仏して「観世音」と号するというのは④のみで、此土において観世音菩薩として衆生を救済する根拠を、閻浮提においてかつて発した誓願によるものとして説明している。

二 敦煌文献と石刻資料にみる「観世音仏」信仰

「観世音仏」と表記する資料は北朝時代のものにしばしばみられる。敦煌文献S七九五『観世音仏名』一卷は、巻初が欠損しているが、仏名を列挙する仏名經の性格を備えた文献である。ジャイルズ目録では六世紀のものとする。最初の二

紙は『現在十方千五百仏名並雜仏同号』（S二二八〇）の東方五十三仏（前半部欠損）・南方三十八仏・西方十五仏・北方六仏 上方廿七仏にほぼ一致する仏名を書写している。割註には、「却八十劫生死之罪」などと記している。つづいて、「観世音仏」を一行五仏で末尾まで二五三〇（ジャイルズ目録による）整然と書写し、尾題に「観世音仏名一卷」と記す。「観世音仏」に対する熱烈な信仰をうかがうことができる。

この「観世音仏」については、石刻資料にも事例がいくつも見られる。南斉の建武二年（四九五）の造像銘に「敬造観世音成仏像一軀」とあり、像容も菩薩形ではなく、仏形であることから、観世音の成仏に対する信仰が、五世紀には既に存在したことがわかる。他にも東魏天平二年（五三五）張法寿息榮遷等造像記に「観世音仏主」、武平六年（五七五）鄭季茂六十一人等造像記にも「上坎観世音仏主」とある。ただし、菩薩形でありながら「仏」と記すものもあり、すべての造像者が菩薩と仏の違いを明確に認識していたとは考えられない。山東の摩崖仏名の三件⁽⁶⁾においては、いずれも「阿弥陀仏」の隣に「観世音仏」が刻まれており、観音を阿弥陀仏の補処の菩薩として説く『観世音菩薩授記経』などをふまえた表現と考えられる。北響堂山石窟大業洞には、隋代のものとされる過去七仏への帰命を表す刻字が「南无維衛仏」から「南无釈迦牟尼仏」まであり、次に「南无観世音菩薩」という刻字、

その下の段に「南无弥勒仏」の刻字があり、それぞれ対応する像も造られている。ここからは、三世仏の系列において、釈迦を継ぐものとして観音を位置づけようとする意図を見出すことができる。

三 『弘猛慧海経』「観世音十大願」石刻

河北省涉県木井寺武平四年（五七三）刻経碑には、『弘猛慧海経』の観音十大願が刻まれていることを筆者は現地調査により新たに発見した。この碑陰額には篆書で「石垂教／経之碑」と刻まれる。碑陽一行目に「仏垂般涅槃略説教戒経一卷」と記し、その下に『大智度論』卷十六の一節「如法・行、非法不応受、今世亦後世、行……」[T25:178c]を刻む。碑陽の第二行目から右側、碑陰、左側の一行目までにかけて『仏垂般涅槃略説教戒経』（『遺教経』）全巻を刻み、続けて、観世音十大願、最後に紀年題記が刻まれる。この碑については、馬忠理氏が簡潔に紹介しているが、訂正すべき点もある。『遺教経』の末尾と観世音十大願が刻まれている左側のみ録文を示すと、「等且止、勿得復語、時將欲過、我欲減度、是我最後之所教誨。 仏説垂教経一卷 大悲観世音願知一切法／大悲観世音願乗般若船 大悲観世音願得智慧風 大悲観世音願得善方便 大悲観世音願度一切衆／大悲観世音願使越苦海 大悲観世音願得戒足導 大悲観世音願登涅槃山 大悲観

世音願会无為舍／大悲観世音願同法性身 大齊武平四季歲次癸巳八月甲午十五日戊申龍花寺比丘法玉、劉貳同妻馮令興、／王靈援邑人等、敬造石経碑一区、仰為 皇帝一切衆生同登正覺。邑人張遵業、邑人王零慧、邑人……」となる。馬氏は「大悲観世音」で始まる十の偈の部分の録文を示さず、その出典を『法華経』普門品とするが（『山東摩崖刻経研究』続、二六六頁の表参照）、この偈は吉蔵『法華義疏』卷十二や栖復『法華経玄賛要集』卷十に引用される『弘猛慧海経』の観音十大願と一致し、明確な紀年を有するものとしては、既に指摘されている隋代の八会寺刻経より遡る、最も早いものである。

河北省曲陽県の八会寺刻経龕は、東西南北四方の壁に二十ほどの経の節文（偈が多い）を刻んでおり、隋代の紀年題記も残されている。その南壁に、東側から順に「弘猛慧海経観音願」と題した観世音十大願と『遺教経』とをとりあわせて刻んでいる。ちなみに房山雷音洞の『遺教経』のとなりには『高王観世音経』が刻まれている。釈迦の最後の教えを説く『遺教経』と観音とを関連づけようとする意図をこれらから見出すことができる。

おわりに

六朝期において観音信仰の盛行とともに、観音の来歴や仏との関係についても人々の興味関心が高まったと考えられる

北朝石刻にみる「観世音仏」信仰（倉 本）

が、敦煌文献や石刻からは、観音を仏として崇拝する信仰の広汎な存在が推察される。観音の成仏を説く經典としては、観音に西方浄土の阿弥陀（無量寿）仏の補処の菩薩としての地位を与える『悲華經』や『観世音菩薩授記經』などの翻訳經典がある。しかしそれらでは満足できず、より現世のこの世界での救済者としての観音の地位を重視して『観世音三昧經』や『弘猛慧海經』が撰述されたと考えられる。特に本稿では、渉県の北齊武平四年の刻經碑に『弘猛慧海經』の観音十大願が『遺教經』の後に刻まれていたことを新たに指摘した。この組み合わせは、他の隋代の八会寺刻經龕にも見えるが、北響堂山大業洞の仏名題記の配列をも考え合わせると、釈迦のあとを承けたこの世の救済者として観音を位置づけ、それが観音の本願によるものであることを強調したものであると言えよう。

- 1 『出三藏記集』卷四には、『観世音成仏經』という經名がみえるが、既に亡佚して遺憾ながら内容をうかがうことがきかない。
- 2 張肖馬・雷玉華「成都市商業街南朝石刻造像」『文物』二〇〇一年第十期。
- 3 顔娟英主編『北朝仏教石刻拓片百品』中央研究院歴史語言研究所、二〇〇八年、八七頁。
- 4 『山右石刻叢編』卷二。
- 5 松原三郎『中国仏教彫刻史論』吉川弘文館、一九九五年、図版一六七Cや四〇六など。

6 洪頂山摩崖、徂来山映仏巖武平元年（五七〇）王子椿刻經、陶山摩崖。頼非「僧安刻經考述」（焦徳森主編『北朝摩崖刻經研究』続、天馬図書有限公司、二〇〇三年）参照。

7 馬忠理「邯鄲鼓山、滏山石窟北齊仏教刻經」（前掲注『北朝摩崖刻經研究』続 所収）、同「邯鄲北朝摩崖仏經時代考」（焦徳森主編『北朝摩崖刻經研究』三、内蒙古人民出版社、二〇〇六年）。

8 八会寺刻經龕に『弘猛慧海經』観音十大願が刻まれていることは、張綏「石刻仏經中的新發現與新解讀」（榮新江・李孝聰主編『中外關係史——新史料與新問題』科学出版社、二〇〇四年）が指摘している。

（後記）本稿に関する現地調査については、龍谷大学佐藤智水氏を中心とする調査団に筆者も参加させていただいて行ったものである。ただし、録文の文責は筆者にある。調査においては、渉県文化教育体育局、渉県文物保管所、曲陽県文物保管所、峰峰磁区文物保管所の御協力を賜った。ここに厚く御礼申し上げたい。

〈キーワード〉 北朝、石刻、観世音仏、観音十大願、弘猛慧海經、遺教經

（東京大学大学院）